
聖夜の贈り物

汐路 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜の贈り物

【Zコード】

N6207F

【作者名】

汐路 凜

【あらすじ】

サンタクロースはクリスマス・イヴの夜にやつてくる ほら、耳を澄ませば聴こえてくるはず。冬空に響く鈴の音が ここにも、サンタクロースを待ち侘びている男の子がひとり。昨年書き上げた作品です。クリスマス気分に浸つて頂ければ幸いです。

(前書き)

童話は初の試みなので、手探り状態で書き上げました。子供の視点になつてるので当初すべて平仮名で書いたのですが、他サイトで読みにくいという意見も頂いたので、改訂しました。

サンタクロースはクリスマス・イヴの夜にやってくる。毎年クリスマスの朝には、枕のそばにプレゼントがおいてあるんだ。

今日はクリスマス・イヴ。

ぼくは朝からサンタさんが来るのが待ち遠しくて、たっくんが遊びに来たときも、サンタさんに手紙を書いていたんだ。

「れんくん、なにしているの？」

テレビにあきたたっくんが、床の手紙をのぞきこいていた。

「サンタさんに手紙がみかれてるの。でもクリスマス・イヴだから

「サンタさんはパパなんだよ」

ぼくがサンタさんのお話をすると、たっくんはいつもそういつぱい。でもね、ほんとうはたっくんも、サンタさんを信じたいんじゃないからって思うんだ。

だってぼく、ようひえんでたっくんがサンタさんにお手紙を書いているのを見たことがあるもん。たっくんははずかしがりやなんだから、ぼくは見ていないふりをしたんだけど。

+

夜になつて、おじこちゃんとおあちゃんがたっさんプレゼントをもつてやってきた。

ママの作ったごはんを食べて、大人はお酒を飲んで、みんなで

クリスマス・パーティー。

みんなが幸せそうな顔をしている。だからぼく、クリスマスって大好きなんだ。

「早く寝ないと、サンタさんが来てくれないわよ」

ぼくに絵本を読んでくれながらママがいった。

でもぼくは今年こそ、サンタさんが来るまでせつたいて起きているんだ。

だつて聞いたことがいっぱいあるんだもん。

たとえば、

『うちにねえんとつがないのこ、いつもビックりはなつてへるのへ。』

とか、

『トナカイはビックりしてへるをとぶの?』

とか、ほかにもたくさんあるんだけど、まだ一度もサンタさんに会えたことがないんだ。サンタさんが来るまで起きておひつて思ひのこ、いつも眠つてしまつ。

でも今日はがんばつて起きてるね。

シャン シヤンシャン……。

せり、鈴の音が聴こえてきた。

あいつともう、すぐそこまで来てるんだ。

うつしゆつ。

なんだか急いでギギギしててきた。最初に会つたときせなんていふ

う。

までは、やっぽつ

『メリー・クリスマス』

つてあいさつして、それから
「じいじょうかい」もしなきや。いつもプレゼントありがとひつ
お礼をして、それからこっしょこにろんなお話をくるんだ。

げんかんのほうで音がする。

きつとサンタさんだ！

ぼくはいそいでベッドからねおきて、ドアのまくらまくらはしつた。

ズスン。

いつたあーい。いきおこあまつてドアにぶつかつた……と、思つ
たらだれかが立つている。

「なんだ、まだ起きてたのか？」

なあーんだ、パパか。サンタさんかと思つたのに……ちょっとガ
ッカリ。

「早く寝なさい」

「はあーい」

あれ？ パパがうしろにまわした手に、なにかもつている。

「パパ、それなに？」

「え？ えーと……ああ、これは今日パパが会社の人にもらつたん
だよ」

パパはなんだかママにしかられたときの

「いいわけ」みたいに、『まあまあ』と呟つた。

「ふうへん。ぼくにプレゼントかとおもつた」

たっくんが、

『サンタクロースはパパなんだよ』

って言つていたのを思いだした。

「プレゼントはサンタさんが持つて来るんだろう。ほら、早く寝ないとサンタさん来てくれないぞ」

パパつづめ、ママとおなじこと言つてゐる。

「はい。でもぼく、きょうはサンタさんがくるまで、ぜつたいおきてるよ。もしサンタさんがきたとき、ぼくがねてたらパパおこしてね」

「わかつたよ。寒いから早くベッドに入りなさい」

「はあーい。おやすみなさい」

「おやすみ」

ぼくがベッドに入つたのをたしかめると、パパは電気を关してお部屋を出でいった。

+

カーテンのすきまからお円さまが見える。
よかつた。少しでも明るいほうが、サンタさんのトナカイも走り

やすいよな、あつと。

いま何時だらう。

時計の読み方はパパに教えてもらつたんだけど……えーと、短い針が「9」よつよつと上にきてて、長い針が「5」のところにきてるから……9じ25ふん！ こつもなりもう眠つてゐる時間だ。サンタさんて、何時に来るんだわ。

ちよつと眠くなつてきちゃつた。

力チ 力チ 力チ……。

時計の音を聞いてみるとけい眠くなるなあ。でもがんばつておきてなきや……。

力チ 力チ 力チ……。

……。

「もつ寝たかな？」

「いらっしゃなんでも寝てるわよ、もう一、二時だもの」

パパとママの声が聞こえる。やつぱりサンタさんはパパなのかな？ つづん、ちがう、きっとふたりともまぐの「よつよつ」を見に来ただけだ。

キーリッ。

ドアが開いた。

起きてるつてばれたら、怒られつかなかつかな？

「メリークリスマス。蓮へさ

あれ？ パパの声じゃなこ。へゑひ」とは

バサッ。お布団をはねのけて振り向くと、真っ赤なお洋服を着たおじこさんが立っていた。

「サンタさん！？ ほんとこほんとこサンタさんなのー？

「ほんまベッドからジャンパしてサンタさんを抱きついた。

「ホーホーホー！ 今年もここにだつた蓮へとプレゼントを持ちてきたんじやよ

「ほくは最高に高にうれしかつた。だつて、やつとサンタさん会えたんだもん！ 明田、せつたいたつくんに聞かなかつ。やがなわなきや。そつこえば、サンタさんはたつくんのおつかひに立つたのかな。

「はー、これが今年のプレゼントよ

サンタさんほくはくをベッドに座ると、プレゼントをくれた。

「あつがとづー。

「ねえ、サンタさん、たつくさんのおひがいもつこつたの？

「ぼくはさつから気なつていたことを聞いてみた。

『サンタさんは信じてる子のところに来るのよ』

「いつかママがそう言つていたのを思い出したからだ。

「たつくん？ ああ、拓人くんのことかね？」

「うん。たつくんはいつも、サンタさんなんていつていうんだけど、ほんとはたつくんも、サンタさんをしんじたいんだとおもうんだ。もしかしたのあさ、めがさめてサンタさんからのプレゼントがなかつたら、ガッカリするとおもつて……」

サンタさんはぼくにワインクしてこう言つた。

「それなら一緒に拓人くんの家にプレゼントを届けに行こう。

「じつしょに？」

「せうじゅよ。おつと、いかん。外は寒いからな」

そう言つてサンタさんがまたワインクすると、ぼくのパジャマは、ふわふわの白いボタンがついた赤いお洋服に変わつていた。

「うわあー。まほもつかえるの？」

「ま、少しの間だけ、わしの助手とこいつにやじゅな

サンタさんはわざと窓の方へ指を向けて、パチン、と鳴らし

た。窓の向こうは、トナカイの引く馬車が待つところ。

「セー、行ひつか」

「うそー。」

ぼくがサンタさんの

「じょしゅ」だつて。今丑は最高のクリスマスだー。

シャンシャンシャン……。

外の空に鈴の音を響かせて、そりが走りだした。

「うわあー。ほんととてでるよーーー。」

トナカイの引く馬車が高べのぼって、ぼくのおひなも、おとなりのれなちゃんのおひなも、こつも遊んでる公園も、みんなどんびりむかしかくなつていつた。

さつきまでベッドで見ていたお丑わまも、もうひよりとさせられそうなくらい近くに見える。

「寒くないかね？」

「うそ。だいじゅうぶー。」

冬のつめたい空気がほっぺたを刺していたけど、寒くはなかつた。それよじぼくはわくわくしてたんだ。

「ねえ、サンタさん、ぼくのおうがみよんでくれた？」

「おお。まれ、元気だ。ソロアもおこしかったの?」

ぼくがサンタさんに書いたお手紙を、ママはポットに入れたあつたかいソロアとこっしょこ、テーブルの上に置いてくれた。

『だつてお客様だものね』

そう言つていたずらひみたいに笑つてたぼくのママつて、最高だと思つ。

「ほれ、拓人くんの家が見えて来たぞ」

サンタさんが指さした先に、たつくんのおうちが見えた。

「ほんとだ! でもどこからみるの? たつくんのおうちが見えた。ションだから、えんとつもないよ」

「どうからでも入れるわ。わしを待つてる子がいる家ならな

もう言つてサンタさんがまたウインクする。体がふわっと浮いたと思つたら、ぼくらはたつくんのお部屋の中に入つた。

たつくんはベッドの中ですやすやと寝息をたててゐる。起きてあげようかな。きっとサンタさんを見たら喜ぶと思つんだけど。

「メリー・クリスマス拓人くん」

「メリー・クリスマスたつくん」

ぼくはサンタさんのまねをして言つた。

まくらのやまばと、たつくんがよしあげんで書いていたサンタさ

んへのお手紙が置いてあつた。サンタさんはプレゼントを置くと、お手紙をそつとじぶんのポケットに入れた。

「よまないの?」

「だいたいの内容はわかつておるからな。後でまたゆづくら読むよ

「サンタさん、あいてのかんがえてる」とも、わからぬの?」

「誰かに何かを伝えたい時、それが真摯な想いであれば、ちゃんと伝わるんじや」

「しんしつて?」

「真剣?」……「じりじやな、純粹に心から想つ」とじやな

「じゃあ、たづくんはなにをおねがいしたの?」

「やうじやな?」……「それを見て」「うう」と

サンタさんもうつむいて、ベッドの反対側の壁を指をした。

壁にはジョンが映っていた。まるで映画を見ているみたいだ。ジョンで言つのは、たづくんのおうちで飼つている犬なんだけど、いまは動物病院に

「にゅういん」してこる。

郵便屋さんが来たときに、たづくんのママがドアを開けた瞬間、お外に飛び出して行つたんだって。

そのあとみんなで探したんだけど、たづくんのパパが見つけたときに、ジョンは自分りもずっと大きな野良犬に、噛まれてしまつ

ていた。

「ぼくはパパたちが、首を噉まれているから、もう助からないだろうって言っていたのを聞いてしまったんだ。たつくんには言えなかつた。

だつてたつくんは、ジョンが帰つて来るつて信じていいから。でもジョンはがんばつている。ほんとうなら助からないうつて言われていたのに、すこしづつ元気になってきてる。お医者さんもびっくりしていたつてたつくんのママが言つてた。

「おつとたつくんの

「おこのつ」が通じたんだ。

「ナウ キジハナ

「しんじる?」

13

「お祈りとこひのま、ただお願ひにするだけじゃない。心から信じる」とじつ

「やうじゅ。拓人くんはジョンが元気になつて帰つてくると信じておる。ただジョンを助けて下さることお願いしてるだけじゃない。たとえサンタクロースは信じていなくてもな」

サンタさんはやう言つて、こつこつ笑つた。

「れんくん?」

たつくんが田を覚ました。サンタさんの姿を見ると、口を開けて

びつべつじてこる。

「おお、じつやいかん。起きてしまったよ、じやな。少し寝り過ぎ
あたかの」

「たつくん、ジョンはきっともうべからへる
「みんなへりんがべからへるか」

「まくはサンタさんのまえをして、たつくんにカインクした。

「わい、もうそろ次の家に行かなれば。夜はつとつまで明け
てしまつから」

「おやすみ、たつくん。またあしたあそぼうな

「ホーホーホー！ メリー・クリスマス！」

口を開けたままのたつくんはうつらうつらして、まへりんたつくんのお
ひをあおとしました。

+

「……れん、蓮くん」

ママの声で目が覚めた。

「起きて、ははん食べなさい。もう一〇時よ

もう朝なんだ。

せつかくサンタさんにあえたのに……え？ 朝！？

「サンタさんほーー!? ママ、サンタさんみたーー?」

「今年もプレゼント、もうえてみかつたわね。蓮、いい子だったもんね」

ママもまたう言つて、まへのおでこキスをした。

枕のそばには、プレゼントが置いてある。

昨日の夜のサンタさんは、ぼくの夢だったのかな。でもサンタさんにもうつたプレゼントは確かにあるし……まつぱりサンタさんはサンタさんにはなかったんだ。蓮、いい子だったもんね」とうだ。まつぱりうたううだ。

『みんなの未来が元気になるところのサンタさん』

ママもパパも、まつぱりうんの先生だつて言つてたし。
ぼくは信じてる。
だからきっと、サンタさんは来てくれたんだ。
あれ? プレゼントの人に、なにかまつてる。なんだうつ?
……お手紙だ。

「ねえママ、これなんてかいてあるの?..」

「え?」

ママはふしきれつたな顔をして、そのお手紙を読んでくれた。

『蓮くんへ。』

わしが信じたのと、ひくべとこひのまことうじだ。

信じる気持ちがあれば、なんでもできるからじゅ。

自分を信じること、大切な誰かを信じること、そして、見えない何かを信じること。

来年も、その気持ちをわすれずに、いい子で
ス。

サンタクロース

「まへ、昨日の夜サンタさん來つたんだよー。せじ、夢じさせ
なかつたんだねーー！」

ぼくはついでママに抱きついた。

「そうね。蓮が信じていたからサンタさんは来てくれたのね」

た。さへじてひつじがいた。ひつじは、ひつじのへやへやのへやへやだ。

「れんくーん！ あそぼー！」

「あ！ たつくんだ！」

ぼくが急いで走つていくと、たっくんはジョンをだつこしてげんかんに立つていた。

「ジーン、げんきになつたんだねー。」

ぼくが言ひついで、たつくんはつれしあうに笑つた。

「おのれはへて、へそへ、おのじのまねのじる。か

「タケル君、やがてつらさないといたんだね」

たつくんが、ぼくの耳に口を寄せて囁いた。

ぼくはたつくんにウインクした。

サンタさん、今年もプレゼントありがと。ぼくはずつと信じてるから、来年もまた来てね。

メリーカリスマス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6207f/>

聖夜の贈り物

2010年12月11日14時51分発行